

ものがいえる多様で豊かな 言論空間を

武蔵大学社会学部教授 永田 浩三



「表現の不自由展・その後」の会場
撮影：アライ=ヒロユキ

努力と連帯で再開実現

トリエンナーレ表現の不自由展

8月1日に開幕したあいちトリエンナーレ2019の「表現の不自由展・その後」は、一旦中止された後再開されましたが、私たちの社会の状況をどのようにとらえるのか、あらためて問題を投げかけています。この展示に関わっている、

表現の不自由展は8月の1日2日3日で、中止になってしまいました。その後我々を中心とした努力で、6日間再開されるのですが、この展示会のもとでの始まりは、アン・セホンさんという方が中国に向いて、中国に残された元慰安婦の日常を写真に撮って、新宿ニコニコサロンで一等賞に選ばれて写真展をやることになっていました。にもかかわらず、在特会の攻撃であっけなく中止に追い込まれて東

京地裁に仮処分申請を申し立て、仮処分が認められ、再開できるのですが、ものすごく警備の中で、ものすごく異常な、一言もしゃべれないような、そういう写真展が開かれ、これではひどいではないかというので、私が勤務している武蔵大学の前のギャラリー古藤で、もつとのびのびとした写真展をやりましようかとやっただけの始まりです。



講演する永田さん

このアンさんの写真展を3回やり、その後、実はアンさん

が表現の場を奪われたのは2012年ですが、同じようにひどい目にあい、表現の場を

奪われている作品があるのではないかといいことで、分かったのが平和の少女像です。東京都美術館で2012年、レプリカの展示が4日間で中止になりました。これもひどい、最近、展示中止になったものを全部集めて見ていただこうというのが表現の不自由展だったわけです。

「心を踏みにじる」政治家の発言で中止へ

平和の少女像は4年前に展示して、その後ずっと日本にいました。どの美術館も危ない作品だからと引き受け手がなかったのです。しょうがないと長く我が家に居りました。これが日本人たちに見てもらえると、作者のキム・

ウソンさん、キム・ソギョさんが、こんな日が来るのだねと本番を迎えました。ところが8月2日、オーブから2日目、河村名古屋市長が来ます。説明役を私がやるのではないかと言われていたのですが、それはケンカになりました。それがケンカにな

発表の場を奪ってはいけません

補助金不交付に反撃

再開にあたって抽選制というのを実施され、とても制限がきつかったのは残念ですが、作家たちがそれぞれ語り始めました。皆それぞれ語って、お客さんと作家たちのコミュニケーションを図りました。もう一つ炎上したのが天皇の肖像画が燃えるという、20分の映像を含めた大浦信行さんの作品ですが、20分丸々見ていただき、その後どんな感想ですかと、7人一組で話し合

うというワークショップをやりました。私もファシリテーターで司会をするのですが、その中でいろいろな意見はあつていい、でも発表の場を奪臣です。補助金は交付しない、不交付だと言いつちます。本当は文化庁長官が決めてはいけません。宮田亮平文化庁長官はもと、東京芸大の

「文化庁が補助金を出さないのは間違っています。長官、考えを改めてください」と受賞のあいさつで言いました。土井敏邦監督も言いました。ハリウッドスターがアカデミー賞のとき、トランプがやっていることはおかしいと言います。ああいう格好いいことを文化庁の表彰式で2人の監督がやってくれました。とてもありがたいことでした。東京芸大の前では教授や院生や

学生たちが声を上げて、宮田長官がはげれと集まりを持ちました。文化庁は文化を殺すなどということですが。その中で一昨日、三重県の伊勢市で花井さんというクラフィクデザイナーが作った作品が展示中止になります。慰安婦だった女性の写真をコピーしていったからいけないということですが。昨日から騒ぎになっているのがウィーの日本大使館の芸術展の公

金は出すけど口は出さない
4年前の展覧会を芸術監督に後になる津田大介さんが見ていて、自分が芸術監督になったから、この表現の不自由展をやらせてくださいということ、私に言ってくられたのが始まりです。「いいですよ。でも愛知県という行政が覚悟しないとこんなことは出来ませんが、本当に覚悟はありますか」と聞くと、「大丈夫です。大村知事は金を出すけど口は出さないと言っています」

優しくなかったということを知っています。この中止の原因は電話での攻撃ですが、火をつけていた人がいました。高須クリニックの院長です。こういう人が煽ることで、いろいろな人が電話をかけてしまったということですが。この中止に怒ったのが愛知トリエンナーレの作家たちです。外国の作家14組、日本の作家2組と一緒に封印して、たたかってくれたのです。この封印された扉にはたくさん

作家も怒り 作品を封印

この少女像の足はちょっと浮いています。これは韓国社会の中でも彼女たちに居場所がないことを表しています。だから別に反日のシンボルではない。皆、この女性たちに

言論は危機知らせるカナリア

『主戦場』という映画。川崎の新百合ヶ丘での映画祭です。これも慰安婦問題を取り上げていたということで、中止に追い込まれますが、最終的には11月4日に上映できました。市民が中止をはねのけたのです。だから一つひとつたたかえば道は開けていくということかもしれません。

言論は我々に小さな危機を知らせてくれるカナリアの様なもの。一本のマッチを擦ることで、周辺の闇がむしる深いことを教えてくれます。芸術というのは小さな声、メディアも同じです。メディア、芸術があることで、豊かな言論空間、表現空間ができるということ。フランスのラ・トゥールという絵描きは、ロウソク明かりに照らしかつて命を消しました。ロウソク明かりはちっぽけですが、その中で命は輝くということかもしれません。